

一八七一年四月～五月に執筆した『フランスにおける内乱』第一草稿から

(全集⑦五二六ページ)

1. 「社会主義的宗派の始祖たちはみな、労働者階級それ自身が資本主義社会そのものの行程によってまだ十分に訓練され組織されていなかったため、世界の舞台に歴史の動因として登場するまでになつておらず、また旧世界そのものの内部に彼らの解放の物質的諸条件がまだ十分に成熟していなかった時期に生きていた…。…労働者の窮乏は存在していたが、労働者自身の運動の条件がまだ存在していなかったのである」。

2. 「諸宗派〔社会主義運動の諸宗派——不破〕の始祖であるユートピア主義者〔空想的社会主義者〕たちは、現在の社会を批判するさい、社会運動の目標——賃金制度と、それにともなう階級支配のいっさいの経済的諸条件とを廃止すること——を明瞭に述べはしたが、社会そのものの内部に社会改造の物質的諸条件を見いだすことも、また労働者階級のうちに運動の組織的な力と意識を見いだすこともしなかった。彼らは、運動の歴史的諸条件の欠如を、新社会の空想図や計画で補おうと試み、そういう空想図や計画の宣伝を真の救済手段とみなした」。

3. 「労働者階級の運動が現実となつたその瞬間から、空想的なユートピアは消えうせたが、これは、これらのユートピア主義者が掲げた目標を労働者階級が放棄したからではなく、それを実現する現実の手段を労働者階級が見いだしたからであり、それらのユートピアにいれかわつて、運動の歴史的諸条件にたいする真の洞察が生まれ、労働者階級の戦闘組織がますますその力をくわえてきたからであつた」。